

Dr. wasshii  
ドクターワッシーの  
認知症  
よもやま話

【第5回】

天国と地獄



ドにしてから大丈夫ですよ」と、こちらのほうも、Aさんに負けず劣らず、いつもニコニコ顔である。

その都度、注意

72歳のK子さん。「センセ。うちの母ときたら、もうボケてしまつて」などと、患者さんを目の前にして、娘さんの言葉も表情もきつい。K子さんが、薬をのみ忘れた。トイレの電気を消し忘れる。洗濯物が溜まつていた。等々と、診察のたびに嘆く。

し、表情が硬く怒りっぽくなった。と、ここで、心配になってきた。ワッシーだって、神様のいたずらで認知症になるかもしれない。で、どうしたらAさんのようにニコニコ顔でいられるだろうか。

これまでは、わがままし放題の人生を送ってきた。因果応報という。ハンデを取りかえすにはひとの何倍もの努力が必要だろう。が、今からでも遅くないはずだ。家族を愛し、世間様に恩返しをしなければなるまい。忙しい。チョー忙しい。だから、今のワッシーは、あの世のことまでは、かまっておれない。

(石黒修三 医療法人社団いしぐるクリニック理事長)

死んだ後のことまで心配するひともいる。が、ワッシーは、「あの世の地獄も極楽も、霊魂も、この世に生きているひとの脳の中に

忘れたことを責める？許す？

ある。死ねば消滅する」と、密かに思っている。このことは、近著『ドクターワッシーの あら、カルテ』に書いた。

ま、ワッシーのようなボンクラには、本当は、そんな難しいことはよく分からない。だが、患者さんたちを診ていると、天国も地獄も神様も、あの世ではなく、まさにこの世の中にあるように思える。77歳のAさん。ゲートボールが大好きなおじいちゃんだ。

「Aさん。この頃、忘れっぽくなつたと思わない？」などと聞くと、「まあ、この歳ですからね」と、ニコニコ顔で答える。

認知症は、5年以上前に発症した。今では、海馬を含めた脳全体の萎縮もみられる。徘徊こそしないが、もちろん車の運転など任せられない。どこへ行くにも家族が同行しなければ大変なことになる。おしっこはもちろん、大のほうも自然のままだ。時には、その大のほうを手でいじったりする。だが、奥さんも娘さんも、誰もAさんを責めたり、なじったりしない。「手が入らないように、きつめのバン

その都度、K子さんは、辛くて悲しそうな顔をしている。「そのたびに注意するの？」と聞いたら、娘さんは「当然です。でも、どれだけ注意しても治らない」という。当たり前だ。もの忘れをするひとに、「忘れるな」と言ったらもの忘れが治るだろうか。ちよつとした失敗に、その都度、「また、忘れた」などと言われたら、ひとのプライドは木端微塵だ。K子さんの認知症はあつという間に進行

